日本心理学会WS「死生の意味するもの：生と死を見つめる宗教心理学」

終末期患者の有する宗教性と死の受容

大村哲夫
東北大学・医療法人社団爽秋会
ohmura@soshukai.jp

- 太陽も死も直視できない

François VI, duc de La Rochefoucauld

1613-1680

発表の目的

- 日本人は「無宗教」と言われる.
- 「無宗教」日本人はどのようにして死んでいくのだろうか.

- 発表者は，在宅ホスピスの現場で臨床心理士・チャプレンとして終末期患者と出会いながら，彼らが自分の死を，また看取る家族が死にゆく他者の死をどう受け止めるのか，に関心をもっている.
- 本発表では「無宗教」日本人が示す宗教性について報告し，議論をすすめる材料としたい.

日本人の宗教性

- 宗教を信じている　２６．１％（３３．６％）
- 70歳以上　４１．１％（６９．３％）
- 宗教を信じていない　７１．９％
- 読売新聞調査　2008年5月30日
- 括弧内は1979年7月調査

遺族調査からみる死亡患者の宗教性

- 家の宗教　　仏教系　　82．2%
  なし　　10．1%
  キリスト教系　　2．5%
  神道系　　2．2%
  それ以外の宗教　2．2%
  不明　　4．6%
  （複数回答可）

東北在宅ホスピスケア研究会 2008
（2003年1月1日より2007年1月31日在宅死亡患者682人の遺族悉皆調査　回収率57．5%）

遺族調査からみた患者の宗教

- なし　54．6%
- 仏教系　24．3%
- 不明　15．8%
- それ以外の宗教　3 .3%
- 神道系　2．7%
- キリスト教系　2．5%

（複数回答可）

患者の最多年齢層　70代

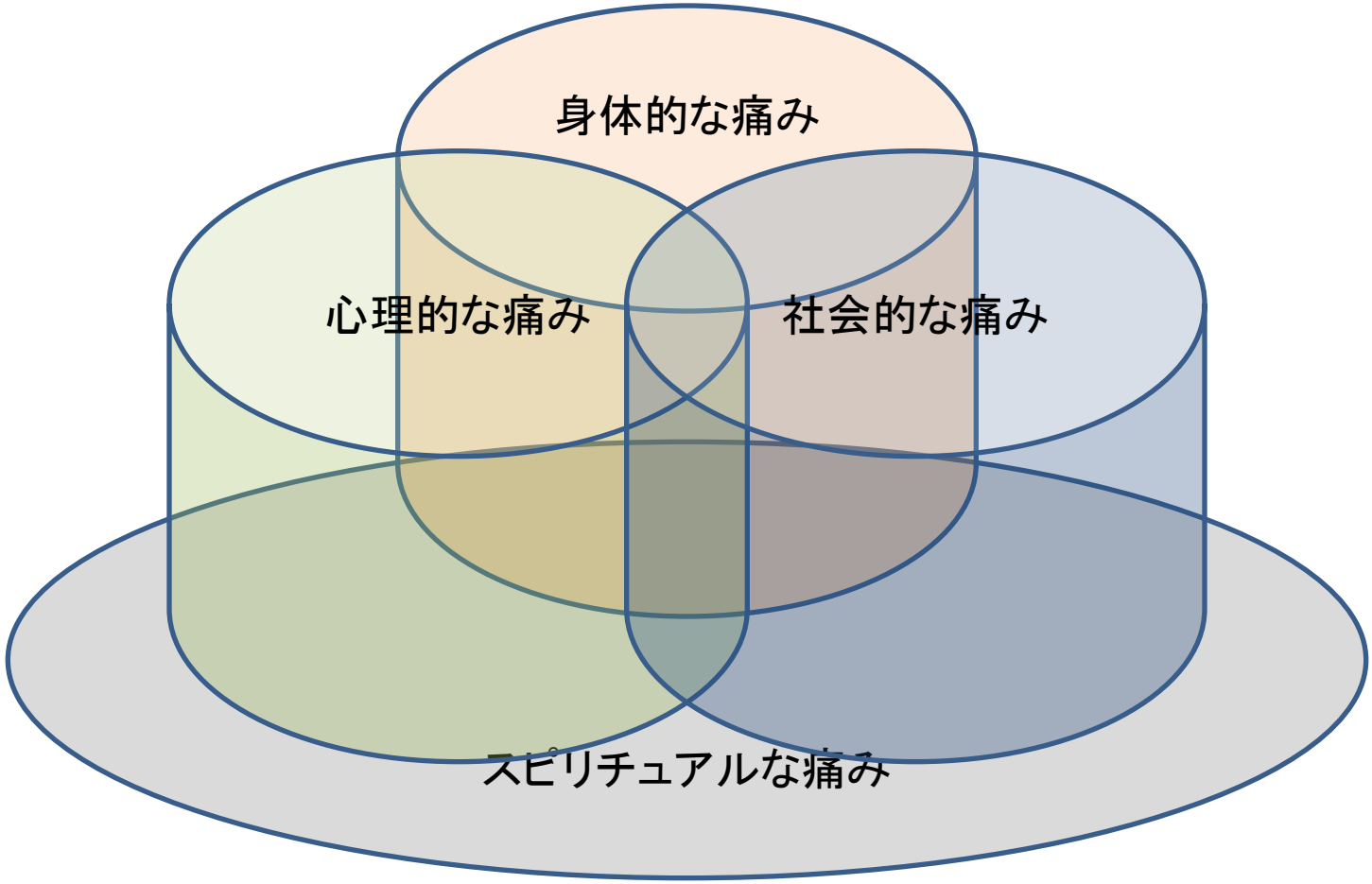
東北在宅ホスピス研究会　2008

よく聞かれる患者の不安

- 死ぬとき苦しむのだろうか.
- 自分が消滅する不安.（納棺，火葬の恐怖も）
- 働けなくなり役立たなくなった絶望.

  「良くなって働く」
- 介護してもらう立場になり他人に迷惑をかける辛さ.

  「こんなになってしまって．死にたい」



痛みの相関図
（竹之内2008，大村2009）

死にゆくなかでの価値観の崩壊

- 趣味・生き甲斐は「健康」を前提にしている．病を得たとき，病気の進行によってそれらを楽しむことはできなくなる．

  徐々に確実にできることが失われていく．

  映画や音楽も受け入れられなくなる．

  家族ですら慰めとならないこともある．

「もっとも大切なもの＝健康」という価値観の崩壊

- 生きるための価値観では，「よく死ぬ」ことはできない．
- 人は世界（社会）に関与することによって，生きる意味を見出すが，病によりそれが不能となると，生きる意味を失う．
- 死は厭うべきもので，無価値で恐怖や絶望でしかないのか．

→　自殺，安楽死，尊厳死．

宗教における死の意味

- 宗教は「生きる意味」を教えると同時に「死ぬ意味」を教えてきた.

  死後世界の存在（天国，地獄，煉獄，極楽etc.）

  死者の復活，

  死者の救済（阿弥陀の来迎，地蔵の六道巡りetc.）

「無宗教」日本人と死

- 宗教を信じていない日本人は，死をどう捉えているのだろうか.

魂のゆくへ

- 死んだ人の魂はどうなると思いますか？

（1つ選択）

消滅する	１７．６％
魂は存在しない	９．０％
生まれ変わる	２９．８％
別の世界へ行く	２３．８％
墓にいる	９．９％

読売新聞調査2008年5月

- 魂は存在しない，あるいは消滅する：
  全体の１／４強（２６．６％）

- 生まれ変わったり，別の世界へ行く：
  全体の１／２強（５３．６％）
- 墓にいる：
  全体の一割（９．９％）
- 全体の６３．５％が魂の存在を認めている

日本人の宗教行動

- 盆や彼岸などにお墓参りをする　78．3%
- 正月に初詣に行く　73．1%
- しばしば家の仏壇や神棚などに手を合わせる　56．7%
- 子どものお宮参りや七五三に行く　50．6%
- 身の安全，商売繁盛，入試合格などの祈願をしに行く　37．9%
- 厄払いをしに行く　34．2%
- お守りやお札などを身につける　33．2%

読売新聞2008年5月より

死亡患者の宗教行動

- 墓参り　74．9％
- 初詣　33．3％
- 折に触れお祈りやお勤め　26．5％
- 日常礼拝，お勤め，修行，布教など　15．0％
- 宗教行動なし　13．7％
- 聖書教典を読む　8．5％
- 不明　2．5％

（複数回答可）

東北在宅ホスピスケア研究会　2008

「無宗教」日本人の宗教性と死

- 無宗教で合理的な現代人の病床にもお守りが下がり，「がんが治る」食品摂取や「治療」がなされている.
- 「宗教を信じていない」多くの日本人は，魂の存在を信じ，死者供養の儀礼を行い，神仏に祈りを捧げている.
- 墓や仏壇に手を合わせることは，死者と交流でき，死者が何らかの力を及ぼすことができると感じているからと考えられる.　ex.「安らかに眠って下さい，私たちを見守って下さい」
- 「死んで無にならず，子孫を見守り，力を行使することが可能，すなわち死者は生者の世界へのつながりを維持している」という観念は，自他の死を受けとめるに当たり，大きな意味を持つ.

死者のヴィジョン

- 死の一週間ほど前になると意識レヴェルの低下によって，幻視を見ることが多い.
- 特徴的なことは「死者のヴィジョン」である.
- 気がつくとそこに死者がいる，と語られることが多い．これを周囲の人は〈お迎え〉と呼んだり，「譫妄」と診断したりする.
- 多くの臨死者は，死者出現に違和感を覚えず，生の世界と死者の世界が交錯する場に自然に存在し，そして死んでいく.

まとめ

- こうした現象と，各調査をあわせて考察すると以下のようなことが考えられる.
- 死後魂が存在しつづけるという考えは，教義にもとづく「宗教」というレヴェルで認識されているのではなく，宗教性あるいはスピリチュアリティの次元で捉えられている.
- この宗教性は日常の死者供養等の習俗を通して維持・強化されている.

- 終末期に見られる死者のヴィジョン等を，スピリチュアリティの次元で自然に受けとめることで，死の恐怖を除き，生から死への移行（死）をスムースにすることができる.
- またこうした安らかな死を看取った看病者は，その経験から生と死の世界が疎通する世界観を学び，「死に方」を学習していく.
- こうして自他の死を受容する「死の文化」は継承されていく.

参考文献

- 大村哲夫2009「終末期における心理と文化ー「譫妄」と「お迎え」」『宗教心理学研究会ニューズレター』10号
- ーーーー2009「文化としての死ー在宅ホスピスにおける心理臨床」『臨床心理学』9巻３号
- ーーーー2009「スピリチュアル・ケア」『どう生き，どう死ぬか』共著，弓箭書院
- ーーーー2009「現代の「お迎え」現象と聖衆来迎ー仏を迎えるトレーニングー」日本宗教学会発表

ーーーー2009「患者の思いと医療者の役割」『在宅緩和医療・ケア入門』医学アカデミー

ーーーー2009「死を受容する文化としての「お迎え」」『日本心理臨床学会発表論文集』 2009年7月

ーーーー2010「〈お迎え〉現象と心理療法－死の文化とスピリチュアル・ケアー」『ニューズレター』3号　日本スピリチュアルケア学会

東北在宅ホスピスケア研究会2008『2007（平成19）年6月実施　在宅ホスピスご遺族アンケート報告書』

読売新聞社2008「日本人の宗教意識」5月30日付朝刊